

シンポジウム シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン3 独法研究機関で働くということ

2011年6月17日(金)、楽友会館2階講演室にて、男女共同参画推進室、キャリアサポートセンター、女性研究者養成システム改革推進委員会との共催で、「私の仕事とキャリアデザイン」シリーズの第3回シンポジウム「独法研究機関で働くということ」を開催しました。

「私の仕事とキャリアデザイン」シリーズのシンポジウムは、新たなキャリア開発を志す女性研究者や、これから研究者を目指すポスドク、大学院生、学部生らを総合的見地から支援するための企画です。今回は、独立行政法人・研究機関における研究活動の現状と展望、職場における男女共同参画の進展について、女性研究者に講演・ディスカッションを行っていただきました。



山末 英嗣・京都大学女性研究者支援センター広報事業実施WG主査による司会進行のもと、はじめに、稲葉カヨ・京都大学女性研究者支援センター長より、開会の挨拶がありました。稲葉先生より、3人の講演者とそのご所属の研究機関について紹介がありました。



1つ目の講演は、大出 真知子 物質・材料研究機構 先端的共通技術部門 理論計算科学ユニット 組織形成モデリンググループ 主任研究員による「私が感じた独法研究員の自由と制約ーキャリアデザインとライフデザイン両方に対してー」でした。物質・材料研究機構では、5年ごとに組織改編を行い、プロジェクト研究(国の方針に沿った研究)とシーズ育成研究(研究者の自由な発想による研究)の5カ年計画を立てて、研究を進めています。国の方針に沿った研究を行うということが、大学での研究とは異なった部分と言えます。

もう一つは、学生指導としての講義がないことです。

もう一つは、学生指導としての講義がないことです。

大出先生の研究は、「金属のミクロ組織形成過程の計算機シミュレーション」で、材料の物理化学的性質を決定するミクロ組織形成過程を視覚化することで、計算機シミュレーションを実現し、フェーズフィールド法の実用化を仕事としておられます。

現在は、定年制職員という安定したご身分で、研究にうちこむ毎日ですが、博士課程修了後は、約5年間、日本学術振興会特別研究員(DC2)、物質・材料研究機構若手任期付研究員という不安定な立場での、研究期間があったとのこと。学生時代を含め、この時期は、研究者としての基礎づくりの期間で、とにかく論文数をかせぐことが必要と考え、研究時間の確保を第一とされたそうです。定年制職員としての就職に目途が立った後に結婚、そして出産を迎えられました。

大出先生は、独立行政法人を、研究者としては理想的な職場の1つと考えられています。その上で、女性研究者が自分のキャリアデザインとライフデザインを実現するためには、①就職するためには研究に没頭する必要がある、②20～30代の時期に結婚・出産・育児をどうするか?、ということ、うまく調整することが必要と話されました。



2つめの講演は、早瀬 百合子 国立環境研究所 地球環境研究センター 温室効果ガスインベントリオフィス 特別研究員による「個人研究の枠を越えてー京都議定書達成の可否を決める日本国の温室効果ガス排出・吸収量を算定するにあたってー」でした。

所属するセンターには、①日本国の温室効果ガス排出・吸収量を算定し、国連気候変動枠組条約事務局に報告、②国連に提出された温室効果ガス排出・吸収量の審査対応、③日本政府代表団として、国連気候変動枠組条約締約国会議に出席し、温室効果ガス排出量の算定方法に関する国際交渉に携わる、という特徴的な任務があります。いずれのフェーズでも、女性の参画率が高く、男性よりも女性の方が、出席者数の多い会議もあるそうです。

国際的な会議での報告や交渉となるため、英語が得意で、コミュニケーションの上手な女性職員の活躍が目まじしく、先輩の中には、国連に転職された方もいます。研究職だけでなく、様々なキャリアデザインの広

独法研究機関で働くということ

がりがあることも、魅力的と言えます。

国立環境研究所では、「子育てを行う職員等の職業生活と家庭生活の両立を支援するための次世代育成支援」として、仕事と子育てや介護が両立しやすいように少しずつ制度が整えられつつあるそうです。まず、1時間単位で休暇が取れるようになりました。休暇取得方法の変更により、女性研究者だけでなく、男性職員にとっても、育児や介護、通院など、様々な家庭のライフスタイルに合わせて、休みが取りやすくなったのです。女性研究者が仕事と子育てを両立しやすい環境が整えられていくことは、同様に、仕事と介護との両立もしやすい環境となったり、幅広く職員の生活環境が整えられていく結果となっていくと締めくくられました。



3つ目の講演は、田和 圭子 産業技術総合研究所 関西センター 健康工学研究部門 バイオインターフェース研究グループ 主任研究員による「組織のミッション達成と自分の専門技術の展開—プラズモニクチップのバイオへのアプローチ—」でした。

国内に10拠点を持つ産業技術総合研究所は、中期計画で、研究職員に占める

女性の採用比率を第1期(平成13年度から16年度まで)の実績(6.9%)から、第2期(平成17年度から21年度)に倍増(13.8%)させることを数値目標とし、女性研究者の数を増やす努力を重ねてこられました。その結果14.15%という実績を出し、見事に目標を達成されました。第3期中期目標(平成22-26年度)では、15%という目標を立て、現在、活動をされています。男女共同参画への取組としては、子どもが軽微な病気の時に利用できる一時預り保育所を、3か所のセンターで設置され、それ以外のセンターの職員に対しては、ベビーシッター利用料の補助をされています。育児特別休暇(有給)も平成19年に新設され、利用者の75%が男性だそうです。

さて、組織のミッション達成と自分の専門技術の展開



というテーマに関しては、産総研で研究をしていく上で、必要なことを3つあげていただきました。1つ目は、内部で認められるためには、自分の専門(得意とすること)をどうやって、組織の流れにのせるかです。2つ目は、異分野の先生・研究者と共同研究を進めることで、融合研究を行い、研究を広げて外部へアピールすることです。3つ目は、企業の意見を聞くことで、産業化における課題をクリアにし、社会貢献をめざすことです。研究は、チーム(技術系契約職員、ポスドク、学生)、そして、グループ内、大学、企業との共同研究によって進めるもので、決して一人で進められるものではないことを認識してほしいとメッセージをいただきました。

講演に続いて、3人の講演者に前にお座りいただき、会場からの質問を受ける形で、ディスカッションを行いました。

同じ独立行政法人であっても、各機関によって、ポスドク研究員の位置づけが異なっていることや、特に、近年においては、任期付き研究者の処遇が様々であることがわかりました。大学での研究との比較では、独立行政法人に課せられた、組織のミッションと自分の研究の方向性を合わせるための工夫や、留学の計画・実行の手続きの違いなどが明確になりました。

また、「研究者の道を選ぶことに迷いはなかったのでしょうか」という質問には、高校生の頃から研究者になりたいと思っていたので、迷いはなかったという話や、就職しようと考えていたが、教授の勧めで研究者の道に進んだという話、まずは研究者の道に進んで、その後に企業への就職を考えてもいいだろうと考えていたという話など、講演者自身の経験を飾らずお話いただき、参加者には、大変参考になったと思います。

最後に伊藤 公雄・京都大学 女性研究者支援推進室長から、まとめのコメントと挨拶がありました。研究活動だけでなく、様々な意思決定の場で、女性の参画が必要であることを、皆が意識し、女性も男性も働きやすい環境を整えていくことが、男女共同参画の推進につながると話されました。
(支援室)



京都大学 理系部局の取り組み

京都大学は、女性研究者数の増加を目指し、女性研究者支援センター、男女共同参画推進室、学内の様々な部局において事業を展開しています。本年度、理系学部・研究科において次のような取組が行われています。

■ 大学院生命科学研究科 「科学技術分野における女性研究者の能力発揮」

生命科学研究科「生命科学キャリアパス」(担当 河内 孝之教授)において、6月21日、元東京大学男女共同参画オフィス特任教授兼コーディネーター都河 明子氏を講師に招き、「科学技術分野における女性の能力発揮」について講義を行いました。塩田 浩平理事他、男女共同参画推進室員及び事務職員も出席し、東京大学での取組などについて学生とともに学びました。



■ 工学部・女子高生のための工学部共通企画テク女子 (オープンキャンパス)

京都大学オープンキャンパス2011において、女子高生のための工学部共通企画(テク女子)(8月11日 9時30分～16時30分)を開催します。「テク女子」では、女子高校生・受験生に対して、工学部の女子学生や卒業生の学生生活、研究生活、進路、仕事などについての講演や懇談を行います。また、希望者には、桂・吉田キャンパスを案内し、各学科研究室の見学を行います。



第15回 日本医療保育学会にて発表

6月4日・5日に名桜大学で開催された第15回日本医療保育学会に病児保育室から保育士2名が参加し、発表しました。

沖縄琉球芸能で幕開けされた今回の学会テーマは「子どもの未来をつなぐ～医療保育のわ～」でした。

学会理事長である帆足 英一先生(ほあし子どものところクリニック院長)の講演では、医療保育の歴史と現状について詳しく説明があり、改めて、医療保育の重要性や学会の目的でもある「医療を要する子どもとその家族を対象として、子どもを医療の主体として捉え、専門的な保育支援を通して、本人と家族のQOLの向上を目指す」ことを再認識しました。

大会会頭の金城 やす子先生(名桜大学人間健康学部看護学科)の講演「小児病棟における保育士の業務実態と期待されること - 全国の小児病棟看護師長の調査から -」では、アンケート調査の結果に基づく分析データの説明がありました。これにより、保育士の配置の状況や勤務体制など多くの情報を得ることができました。病棟での保育士の必要性、病児にとっての保育士の重要性だけでなく、勤務する保育士の専門性の向上が求められていることがよく分かりました。

そして、学会開催地である沖縄県の医療保育についての宮城 雅也先生(沖縄県立南部医療センター・子ども医療センター小児科)の講演では、平成18年に設立されたこども病院について、医師の立場から、設立までの10年間と現在、そして未来について話されました。子

ども医療センターは、沖縄らしい海や、やんばるの森をイメージしてつくられており、とても開放的で、病児の心理面に対して理想的な環境を提供されていることを理解しました。

2日目には、口頭演題のセッションで、「京都大学女性研究者支援センター病児保育室 感染隔離室設置後一年の現状と問題点」について発表をしました。会場では多くの方々に興味を持って発表を聞いてもらうことができました。また、発表後には、たくさんの方から質問や見学希望の話がありました。

病児保育をはじめ病棟保育・外来保育・障害児保育・乳児保育など、種々の施設で働く保育士らとの意見交換のなかで、その活動内容から、様々な面で京大病児保育室の機能的な管理や運営についての重要なヒントを得ることができました。

以上のように、大変、学びの多い学会でした。本大会で知り得た他施設の保育士・看護師の活動状況や病児保育環境の維持・改善の努力を、今後の京大病児保育室での保育内容の向上に役立てていきたいと考えます。

(保育士 北原 朋子)



連載：研究者になる！－第32回－

贅沢はでけへんけど、頭の中に自由がある
薬学研究科・准教授 伊藤美千穂



「このコラムを書くことになったんやけど、何を書いたらええやろか。いつも何を期待して読んでる？」研究室の学生達にこう聞いてみました。「なぜ企業に就職しないで研究者になったのか、なぜ博士課程に進学したのか、それを知りたくて読むけれど、『なんとなく』とか『いつの間にか』とか書いてあることが多くて

ちょっと残念。」複数の学生がこう答えてくれました。なるほどなあと思う反面、私には「いつの間にか研究者になっていた」と書きたくなる気分もよ〜く解ってしまうので困ります。でも、18歳で京大生になり、留学していた時間を除けばずっと京大薬学に居てしまっている私は、彼女ら彼らのよくも悪くもレファレンスになれるのかもしれない、そう思ってこれを書くことにします。

“研究者”という「職業」には淡い憧れのようなものを覚えるけれど、自分の資質では及ばない高みにあるもの、選ばれた優秀な人だけに許された職業—学生時はそんなふうに思っていたような記憶があります。加えて、「女性は博士課程に進学すると就職させるのが難しくなるから進学は許可しない」と教授が平気で告げられた時代のこと、私は研究者になろうと思って進学したのではありませんでした。短く言えば、そこにちょっと魅力的な研究対象があって、導いてくれそうな先生がおられたから進学した、ということになるでしょうか。魅力的なものは、その全貌がはつきりしないから魅力的なのであって、全部が解ってしまっていたら興味の対象ではなくなるでしょう。そのなんとなく惹かれる対象を横目にやり過すこともできたのですが、そうしたらとても後悔するように私には思えたのです。自分にとって魅力的なもの、好きなもの、が朧げに見え始めていた、今にして思えばそういうことだったのかもしれない。何をやるにしても、好きなこと・ものでなければ続きませんし、

初心者には導いてくれる存在が必要で、研究者になる場合もこの組み合わせが大きく影響するように思います。この先生の後ろについていきたい、そう思わせる存在があれば、自分に対する一般的な評価を気にして躊躇するより、まずはともかくついていってみる、そうしてそこで手にする研究材料が自分の好きなものであれば、ほとんど後悔することは無い、そう思います。必要なのは、最初の一步を踏み出す勇気と、自分の判断の責任は自分でとるという覚悟でしょう。自分の生活は自分で責任をとるという意味では、経済的な自立も人によっては必要条件かもしれません。私の場合は、学部学生の間は片道2時間かけて通学する自宅生だったので家庭教師や塾講師のアルバイトでそこそこ貯金し、大学院生になって京都に住み始めてからは貯金を取り崩しながら薬剤師のアルバイトと奨学金でやりくりしていました。でも、金は天下の廻りもの、と申しますし、社会人になるまでは親に借金するのも悪くはないかもしれません。

「この職業はな、贅沢な生活はでけへんけど頭の中に自由がある。金儲けを考えんでいいんや。こんなええ職業はないで、伊藤さん。」指導教官に言われたこの言葉を信じて、私は博士課程2年修了時に中途退学して助手になりました。阪神淡路大震災の明くる年のことです。以来、様々な仕事・出来事に一喜一憂しながらいまだに毎日が精一杯ですが、大学の研究者は「頭の中に自由がある」というのは確かに嘘ではなからうと思っています。残念ながら、金儲けを考えなくてよいという部分は大学法人化以降に嘘になってしまいましたし、外部資金獲得額や論文のインパクトファクター積算値が研究者評価となるこのご時世では、頭の中の自由領域がたいへん狭隘になっているように感じますが、例えば薬学に籍を置きながら、運が良ければ3年目に初めての結果が出る、というような植物相手の研究計画をたてても誰にも文句は言われない環境というのは、やはり大学ならではのものだと思います。「他人の評価を気にするな」「相手と同じ土俵に載って喧嘩するな」は、師であり上司であった先生からよく言われた言葉ですが、これらだって研究者だからアリ、なのではないでしょうか。さあて、この記事を読んでもう一度読んでくださったあなた、研究者になる自分に賭けてみませんか。待ってます！

女性のための相談室 開室日 【要予約】

[7月] 1日、8日、15日、22日、29日 [8月] 5日、19日、26日 [9月] 2日、9日、16日、22日

Center for Women Researchers

〒606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>